

第51回Kozoom28 「思い出の音楽(その2)」

清水健二

第24回のkozoom28に「思い出の音楽」と題してエッセイを書いたが今回(その2)を綴ってみたい。音楽といっても範囲が広すぎるので、暮らしの中で身近な流行歌に絞って思い出を書いてみたい。

戦中・戦後を知る世代の人を85歳以上として日本人口12400万人の5.4%、670万人になってしまった。我々も90年を生きてきて暮らしの激しい変化の中で、歌の記憶は軍歌から始まり、戦後になって自由と平和という希望にみちた「りんごの唄」作詞サトウハチロー(赤いリンゴにくちびる寄せて…)の並木みち子の唄う声が耳に残る。



並木路子の「リンゴの唄」

貧困の時代が続くが、社会変化に沿って流行歌も様々な形で出現してきた。まさに「歌は世につれ、世は歌につれ」の感がある。流行歌を聞けば自分の歩んできた人生の思い出が浮かび上がって来るといふからその存在感はすごいと思っている。特に流行歌の中の演歌は永く島国で暮らしてきている日本人は、素朴な音曲と分かり易い歌詞を大事に唄って来たように思う。戦後になって新しい西洋の音楽文化が入って来たことから世相の変化の中で流行歌がどう変遷し、音曲と共に作詞家の語る言葉についても探してみたいと思った。

私が企業に勤務し、社会人としての自覚を持ち出した1960年頃は、職場で時々懇親会や社内旅行での宴会では、民謡や詩吟、地方の音頭曲などがよく歌われていて、みんなが手拍子をとって唄っていた。伴奏には三味線が弾かれていたものである。

1960年半ばになって東京オリンピックや新幹線の開通を機に、カラーテレビの普及などで、歓楽街で流しをしていた歌手らは演歌を主流にしていたが、テレビへ移



フランク永井の「有楽町で逢いましょう」

行すると共に多くの歌手が生まれ大衆に浸透すると、宴会でも新しい演歌が次々に出はじめた。伴奏には三味線からギターやアコーディオンなどに代わり賑やかになった。村田英雄の「王将」、橋幸夫の「潮来笠」、フランク永井の「有楽町出会いましょう」などよく聞かされた。とにかく高度経済成長の時代に突入していたから、職場の雰囲気も明るく、日々の過酷な仕事でも我慢しながら飲み会を楽しみに先輩、後輩共々楽しんだものである。歌の世界も欧米から新しい曲が押し寄せてきて、日本の演歌の世界も、ジャズや、フォークソング、ポップス等々が入り乱れて流行歌の全盛時代になったと言えよう。一方当時の中年令層(40~50歳代)の人たちは、地方から都会に出てきた人が多く、故郷を偲ぶ歌や色恋、別れ、喜びなど愛憎の歌に心を寄せる人が多かった。千昌夫の「北国の春」等故郷ものは典型的な曲と詞だった。



千昌夫の「北国の春」



八代亜紀の「舟唄」

内回路があるのかなと思ったものだった。

1970年代初期に古い我が家を増改築した時に、やってきた大工さんはラジオカセットを持ってきて毎日のように八代亜紀の「舟唄」や「雨の慕情」など聞きながら仕事をしていたと在宅していた細君が言っていた。また当時流行していた演歌に吉幾三の「酒よ」や八代亜紀等小節の効いた歌も多く、私は仕事で広島の竹原市で建設していた現場へ出かけたおりに、その現場の隣に牛の飼育舎があって、終日拡声器を通じて演歌が流れていた。現場監督に理由を聞くと「牛たちがリラックスして乳の出が良いし、肉質が良くなるということらしいです」という。牛まで演歌漬けにさせるほどで、牛にも心を穏やかにする脳

1980年代に入ってカラオケが普及しスナックバー等が盛況を極めた。飲みに来ている見ず知らずの人の前で、マイクを手に唄う人を眺めていると日本人はこんなに演歌好きなのかと思うほどで、マイクを離さない人も多かった。店によってはステージまで備えていて、歌手気取りで堂々と歌う人の気持ちに私は唾然としたものだった。カラオケブームは海外にも及び、タイへ出張した時、支社長と夕食を日本料理店でとった後、二次会にはカラオケバーへ誘われ全く日本と変わらない雰囲気



ダークダックスの「心のうた」

気を味わったものである。

カラオケバーも近年は家族やごく親しい友達と一緒にカラオケボックスで遠慮なく歌える場に変化してきているが、歌うことで気分が爽快になるならそれもいいことだろうと思う。演歌ばかりでなく、ポップ・コーラスで人気のあったダークダックスなどは色々な分野の歌を唄いはじめて、演歌と競うように流行歌が多彩を極めた。ところが最近では演歌は低調になり、様変わりして若者達はグループを組んでテンポも速く、激しいリズムとダンスに興じ、メロデーなど味わえなくなった。歌詞さえさっぱり聞き取れず私などはついていけなくなってしまう、まさに高齢者は取り残されてきている思いでいる。

もともと私は演歌はあまり好きでなかったし、まして人前で小節を回しビブラートを効かせる唄い方はとてもできなかった。どちらかと言えばフォークやグループソング、ジャズ風な歌に興味があったが、会社の仲間たちとの付き合いで出かけるバーでは演歌ばかりで、知らず知らずに慣らされてしまった。現役を離れて趣味の仲間達と付き合いをはじめると、またしても演歌好きな人の多いのに囲まれてしまった。

ヒット曲やレコード大賞をとるような演歌は、曲の良さもさることながら、私は歌詞に関心を持ち聞くようになった。演歌に使われる語句は、山河、海、漁船、故郷、北国、風雪、酒、女、別れ、情愛など日々の暮らしの中での身近な事象をとりあげているのが多い。私は作詞家がこうした言葉を使いこなし、表現していく能力に魅かれて、その豊かな感性や人の生き様、情感など深い心情を語る言葉に感嘆することが多い。作曲家は自分の曲でありながら、歌手の個性に合わせて原曲と多少違ったりされるが、歌詞は変えられることがないので、詩歌に作詞家の思いを味わうことができ楽しんでいる。

時々、「わが人生に悔いはなし」(作詞なかにし礼 作曲加藤登紀子 歌手石原裕次郎)の曲を耳にすると、現役中よくお付き合いした、技術コンサルタントの社長の十八番だったことを思い出す。(はるばる遠くに来たもんだ 長かろうと短かろうと 我が人生に悔いはない この世に歌があればこそ こらえた涙いくたびか 親にもらった体一つで 戦い続けた気持ちよさ …)と続く。社長は自分の人生に悔いはない



石原裕次郎の「わが人生に悔いはなし」

と強がりを行っているようでもあり、また心からそう思っているのかと今でも疑問が蘇ってくる。

今年のパリ・五輪の閉会式に、かつてフランク・シナトラが唄った「マイウエイ」を聞いて、日本では 訳詞の中島潤 歌手の布施明を思い出した。(今船出が近づくこの時にふとたたずみ 私はふりかえる 遠く旅して 歩いた若い日を すべては心の決めたままに 愛と涙とほほえみにあふれ 今思えば 楽しい思い出よ...)と私も口ずさむほどの懐メロの詞である。



フランク・シナトラと布施明の「マイ・ウエイ」

近年は自分も歳を重ねるに連れて、人生を詠んだ歌詞に改めて感動することが多くなってきている。ヒット曲を多く出してきた作詞家に 阿久悠、岩崎時子、浜圭介、小椋佳、なかにし礼、松本隆、星野哲郎等々と数え切れない。こうした方々は老境の歳までに至らずして、人生の深さを感じとって言葉を紡ぐ才能に私は常々驚嘆させられている。



美空ひばりの「川の流れるように」

れのように とめどなく空が黄昏に染まるだけ...)この曲を聞くと、歌詞と同じ心境になり、残り少ない人生を大切に過ごしたいと思う今日此の頃である。

最後に「演歌の中の名曲は？」と問われたら、やはり「川の流れるように」をあげたい。作曲見岳章 作詞秋元康 歌手美空ひばりである。(知らず知らず歩いてきた 細く長いこの道 振り返れば 遥か遠く 故郷が見える でこぼこ道や 曲がりくねった道 地図さえない それもまた人生 あゝ川の流れるように 緩やかにいくつも時代は過ぎて あゝ川の流

令和6年9月 記